

生徒が歴史の場면을演じる授業の実践報告

—主体的な世界史学習をめざして—

地歴科 小田原健一

高校の世界史（特に世界史B）で取扱う内容は、時代、地域ともに実に広範囲に渡っている。しかし、現行の学習指導要領によると、世界史Bの科目の性格について、「詳細で専門的な世界の歴史を学ばせようとするものではない。世界の歴史への・興味・関心を引き出し、－（略）－生徒の主体的な学習を通して歴史的思考力を培うことを目指した科目である。」とされている。現段階では世界史Bの授業では未実施だが、昨年度から今年度にかけて、世界史Aと学校設定科目・応用世界史（3年生世界史選択者の一部を対象）の授業で実践した生徒の主体的な学習を促すための試みを報告する。

<キーワード> 主体的な学習 興味・関心

1 はじめに

この2年ほど、授業中の生徒の様子が変わってきていると感じている。全体的な学力は以前と比べると上昇傾向にあるが、板書事項の解説をしている時や歴史に関するエピソードを話している時に、あまり興味・関心を引き出せていないという印象を持っているのだ。では、その生徒たちが授業に興味・関心がないかという決してそうではなく、授業の感想を書かせたり、小テストの作問をさせたりすると、世界史が好きなことが伝わってきたり、工夫を凝らした問題を作成したりしてくれる。また、大量のペットボトルキャップを使ってピラミッド作りに挑戦した時は、多くの生徒が生き生きと活動していた。このような生徒たちの姿を見て、10年前に初任者研修で講師の方が話された言葉を思い出した。それは概ね以下のような内容である。「小・中学校では、生徒が主体的に活動する社会科の授業が実践されている。高校で、従来通りのトーク・アンド・チョークだけの授業を行うと、生徒は授業への興味・関心を失っていく。高校の地歴・公民でも生徒が主体的に活動できる授業を取り入れる必要がある。」正直なところ、当時はこの言葉の意味を理解できていなかった。だが、この2年ほどの生徒の様子を見て、興味・関心を引き出し、生徒の期待に応えるためには、生徒が主体的に活動できる場を用意する必要があることを強く感じている。

2 昨年度末の授業実践

毎年、4月の最初の授業で書かせている自己紹介カードの中に「今までの授業で一番印象に残っている授業は？」という項目を設けている。そこに「中学校の社会で、自分たちが歴史上の人物になって、演技をする授業が楽しかった。」と書いた生徒がいたのだが、この意見を参考に生徒が様々な方法で歴史の場면을演じる授業を行うこととした。

平成26年度は2年生の世界史Aの授業でこの授業を行った。本校では文系の生徒が2年次に日本史・世界史のA科目（2単位）とB科目（3単位）を履修する。世界史Aの受講者は、日本史Bを受講しており、大学入試も日本史Bで受験する「日本史選択者」である。当然、世界史より日本史

が好き・得意という生徒が多く、トーク・アンド・チョークの授業には興味を示さない傾向が強かったため、まずは世界史 A の授業での実施に踏み切ったのである。

生徒に配布した授業案内は次の通りである。

2 年世界史 A 授業予定

2 学期残りの授業と 3 学期最初の授業では、グループで調べた歴史の一場面を発表してもらいます。発表の形態は普通の発表ではなく、グループのメンバーで演じてもらいます。演じ方は時代劇・ミュージカル・人形劇・紙芝居が基本です。この他にふさわしい演じ方があれば、次の授業までに提案してください。OK か検討します。なお、各グループとも脇役限定（例：商人 A）で小田原を起用してもかまいません。

提出物として紙芝居なら作品、その他は脚本を提出してもらいます。

以下のように授業を進めます。

【2・3組】

12月5日（金）	グループ決め
12月10日（水）	グループ活動 1（場面、発表方法を定める）
12月12日（金）	グループ活動 2
12月19日（金）	グループ活動 3
冬休み	無理のない範囲で構想を練る
3 学期最初の授業	グループ活動 4
3 学期 2 回目の授業	グループ活動 5
3 学期 3 回目の授業	発表

【4組】

12月9日（火）	グループ決め
12月11日（木）	グループ活動 1（場面、発表方法を定める）
12月16日（火）	グループ活動 2
冬休み	無理のない範囲で構想を練る
3 学期最初の授業	グループ活動 3
3 学期 2 回目の授業	グループ活動 4
3 学期 3 回目の授業	グループ活動 5
3 学期 4 回目の授業	発表

これに基づいて、準備・発表を行い、全ての班の発表後に以下のアンケートをとった。

- 1 最も良かった班は？
- 2 1 を選んだ理由は？
- 3 自分たちの発表準備を振り返って（楽しかった点、反省点など）
- 4 自分たちの発表を振り返って（良かった点、反省点など）
- 5 準備と発表をとおして世界史への興味は高まりましたか？
とても ある程度 変わらない 低くなった

- 6 5を選んだ理由は？
- 7 準備と発表をとおして世界史の学力は高まると思いますか？
とても ある程度 変わらない 低くなる
- 8 7を選んだ理由は？
- 9 その他、ご自由に

このアンケートの質問5・7の集計結果を次の表に示す。

表 アンケート結果

	とても	ある程度	変わらない	低くなった(なる)
質問5：興味	17人(34%)	30人(60%)	3人(6%)	0人
質問7：学力	23人(46%)	21人(42%)	6人(12%)	0人

この結果から、生徒が自ら歴史の場면을表現する授業で、興味・関心を引き出すことができ、さらには学力向上へも成果があったと判断できる。また、私はアンケート実施前、興味・関心を引き出すことはできても、学力向上に結びつけられるかについては、一抹の不安を感じていた。しかし、アンケート結果によると生徒たちは自分たちの活動を興味・関心を持つという側面よりも、むしろ学力向上という側面に結びつけていたことがわかった。

以下に質問6・8に対する生徒の回答の事例を示す。

質問6（興味についての理由）への回答

- ・教科書通りのことだけでなく、視点を変えて見れるので、興味がわきました。
- ・香辛料について授業ではさりとしか触れていなかったけど、1つ1つの歴史を知る良い時間で、とても価値のあるものだった。
- ・自分で調べることが楽しくて、もっといろんなことを調べてみたいと思った。
- ・みんなで一つのものをつくるために協力し合い、同じものを目指すより一人でやるより何倍も楽しかったし、頑張れた。楽しみながらも、ノート・教科書・本などいろいろな教材をしっかりと見て復習できた。楽しく学べたので、他の単元もまた見たくなった。ストーリー性があるものが多いので、世界史は面白い。
- ・他の班の発表を見ることで、知らなかったことを知れたりすることができるので、もっと知りたいと思う。
- ・劇として発表しようとする、この人は何をやってとか、どんな性格なのかとか調べることが必要だから興味は高くなった。

質問8（学力向上についての理由）への回答

- ・それぞれの班でバラバラなことを調べるので、より一層学べる。
- ・一部では知識が深まるのは重いますが、それが学力につながるかは微妙だなと思いました。
- ・ストーリーを作ることによって、情報をたくさん得ることになり、より多くの知識が増えました。よって学力は高まると思います。
- ・正確なものを伝えようとするため、みんなで教科書などを見て復習するので、学力が高くなると思います。
- ・準備と発表を通して楽しく覚えることができると思ったから。

- ・興味を持てれば好きになって、勉強しようという気持ちになるから。
- ・普段、教科書やノートの文字から想像しないといけないけど、劇や芝居とかをやるとイメージもできるし、印象にも残るから高まると思う。

これらの回答から生徒たちは準備、発表、さらには他の班の発表を通して、世界史に対する興味・関心を高め、そこから学力向上につながると捉えていたことが伺える。アンケートでは学力について特に定義をしていないため、生徒によっては学力を試験で点を取るための力と認識したり、広い意味での学力と認識したりとずれが生じていたことは否定できないが、この点については現段階では特にこだわる必要はないと思っている。また、他の記述欄では次のような生徒の意見・感想が参考になった。

- ・楽しかったのは準備です。休日集まってわいわいしながらやりました。皆が協力してくれたので、さくさく進みました。

この感想を書いた生徒の班はフランス革命について人形劇で表現をしたが、脚本も史実に沿ってしっかり構成されていたうえ、イラストも上手に描けており、他の多くの生徒が最もよかった班に選んでいた。休日に個人で図書館に行くことは期待していたし、実際に行った生徒もいた。しかし、休日に家に集まってまで活動してくれるとは思っていなかったのが、発表内容以上に取り組み方に驚かされた。なお、地歴科の学習指導要領では、改善の基本方針の一つに「- (略) - 国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する - (略) - 」と記されている。また私自身も、どの科目であろうと「社会」の授業であるからには、単に大学入試に対応できる学力を身につけさせるだけでなく、家庭・職場・地域など社会の様々な場所で活躍するためのコミュニケーション能力、思考力、粘り強さなどを授業の中で育てたいと考えている。このような資質や能力は教員主導の授業だけで育成するのは困難であるため、班の生徒たちが協力して、一つの作品を完成させるという体験は有意義であったと思っている。

- ・先生が単元を一つ決めて、その単元を自分たちの解釈で、それぞれのグループが発表してみるのも面白そう。

この感想を書いた生徒も先ほどの生徒と同じ班に属していた。この生徒のように全ての班が共通の単元を発表したら面白そうと書いた生徒はもう一人いた。逆に自由に選べて良かったという生徒もいるが、多くの班が場面設定に時間がかかってしまい、その点を反省点にあげている生徒もいたので、前者の意見も今後の授業では参考にしていきたい。

また、アメリカの人種差別について、芝居で発表した班は日本語と英語の両方で台詞を話すという試みを自主的に行った。この発表は今年度の実践で参考にしているので、後ほど紹介させていただく。

3 今年度の授業実践

昨年度の授業が終わった後、他の教員から「A科目だけでなく、B科目でも同じような取り組みをし、学力向上につながることを示すことができれば、このような取り組みがもっと広まるのではないか。」とアドバイスをもらった。今年度、2年生で世界史Bを担当することになった当初は2年生・世界史Bでの実施を検討したが、授業の進度を考えると、実施はまだ困難と判断した。

本校では3年生の文系3クラスのうち、1クラス（私立文系大学などへの進学希望者を対象としたクラス）の生徒を対象として地歴科に学校設定科目「応用日本史」・「応用世界史」を開講している。つまり、このクラスの世界史選択の生徒たちは世界史B（5単位）に加え、応用世界史（2単位）を履修することになる。従来から、この応用世界史では、調べ学習、模擬授業、生徒による問題解説など生徒主体の取り組みを行ってきたが、今年度はここで、歴史の場면을演じる授業の実施を検討した。そして、受験を控えた生徒たちであるので不安がないわけではなかったが、昨年度から意欲的に授業に取り組んでくれていたこともあり、実施するに至った。生徒への案内は次の通りである。

応用世界史 授業予定

1学期残りの授業と2学期最初の授業では、グループで調べた歴史の一場面を発表してもらいます。発表の形態は普通の発表ではなく、グループのメンバーで演じてもらいます。演じ方は時代劇・ミュージカル・人形劇・紙芝居が基本です。この他にふさわしい演じ方があれば、次回の授業までに提案してください。なお、各グループとも脇役限定（例：中小農民A）で小田原を起用してもかまいません。

スケッチブック、画用紙、マジック、割り箸（人形劇用）は小田原が用意します。

提出物として全グループに告知ポスター、紙芝居のグループなら作品、その他のグループは脚本を提出してもらいます。

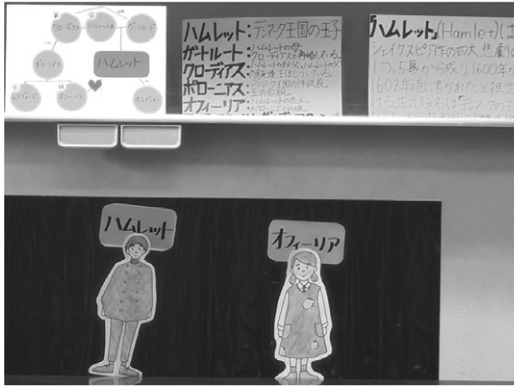
7月14日（火）	グループ、発表方法、場面決め		
7月15日（水）	グループ活動1		
7月22日（水）	グループ活動2		
夏休み	無理のない範囲で構想を練る		
9月1日（火）	グループ活動3	9月2日（水）	グループ活動4
9月8日（火）	グループ活動5	9月9日（水）	グループ活動6
9月15日（火）	グループ活動7	9月16日（水）	発表

次の各写真は発表準備中の生徒の活動や、発表の様子である。

発表準備の様子



発表の様子



(人形劇による発表1)



(人形劇による発表2)



(芝居による発表)

なお、各班の発表テーマと方法は次の表の通りである。

表 発表テーマと方法

	発表テーマ	方法
A 班	『ハムレット』	人形劇
B 班	エリザベス1世とフェリペ2世 (イギリス・スペインの外交関係)	人形劇と芝居
C 班	カエサルの人間関係	芝居
D 班	フリードリヒ2世と 愉快的仲間たち	人形劇
E 班	『レ・ミゼラブル』	人形劇と演奏 (ミュージカル風)

全てのグループの発表後、昨年度と同様のアンケートを実施したので、その結果を次の表に示す。

表 アンケート結果

	とても	ある程度	変わらない	低くなった (なる)
質問5：興味	10人 (41.7%)	12人 (50.0%)	2人 (8.3%)	0人
質問7：学力	6人 (25.0%)	15人 (62.5%)	3人 (12.5%)	0人

昨年度の結果と比べると、興味・関心を引き出すことには成功しているが、学力向上への成果は不十分だったと言わざるを得ない。

次に質問6・8に対する生徒の主な回答を紹介する。

質問6（興味についての理由）への回答

- ・映画とか舞台も世界史で習う時代背景が分かったら、もっと楽しめると思ったから。
- ・授業でやったところもやらなかったところも、劇などを通して見ると面白いと思えるのでもっと世界史を知りたいと思ったからです。
- ・発表のために、いろんな資料を見て調べていくうちに、自分の知らなかったことをたくさん知ることができたから。もっといろんなことを知りたいと思った。
- ・私たちが今学んでいる歴史は大ざっぱに戦いの名前や人物などの表面上でしか、習わないので、一人一人物語があって、もっと知りたいと思いました。
- ・他の班の発表を見て、もっと詳しく知りたいなと思いました。これを機にもっと世界史を勉強したいと思いました。
- ・図説の面白さに気づいた。

質問8（学力向上についての理由）への回答

- ・私たちの班は一つの物語の中のお話を発表したので、そこまでだけど、他の班は学習したところを発表していたので、とても勉強になりました。
- ・深いところまで調べるから、一つのことに関しては詳しくなる。
- ・自分たちの力でやると身につきやすいと思うから。そして、楽しくて好きになれるかもしれないから。
- ・お面作成チームと台本チームに分かれて準備したので、台本チームの学力は高まるかもしれませんが、お面作成チームは絵を描くだけだったので、変わらないと思ったからです。
- ・絵を描くことに集中していたから。
- ・教科書で読むのとは全然違うから、劇や紙芝居の方が親しみやすいし、インパクトがあるから覚えやすい。

質問6への回答から、生徒たちは発表準備を通して、今まで知らなかったことを知り、さらに多くのことを知りたいと興味・関心を高めていたことがわかった。

また、質問8への回答から、この授業が抱える課題も見えてきた。一つは今回、文学作品をテーマとしたことである。文化史は多くの生徒が敬遠していたり、苦手としたりしている。私も通常の授業では、できる限り写真や映像を見せて、興味・関心を引き出そうとしているが、十分な成果があがっているわけではない。そこで、文学作品をテーマにすることも勧めていたが、結果は、その作品について調べることが中心になってしまった。質問8の一つ目の回答（・・・一つの物語の中のお話を発表したので、そこまでだけど・・・）は、『ハムレット』を演じた班の生徒の意見である。一方で、質問6の一つ目の回答（映画とか舞台も世界史で習う時代背景が分かったら、もっと楽しめると思っ

たから)は、『レ・ミゼラブル』を演じた班の生徒の意見である。これは原作や映画の中で、19世紀前半(七月革命から二月革命にかけて)のフランスの時代背景が色濃く表現されていたために、作品の内容以外にも調べる対象があったためと考えられる。二つの班の発表から、文学作品をテーマとする場合は、その作品だけの発表にならないように初めに注意を促す必要があることがわかった。そして、二つ目の課題は準備段階における役割分担である。質問8の4つ目の回答(・・・台本チームの学力は高まるかもしれませんが、お面作成チームは絵を描くだけだから、変わらないと思った・・・)はカエサルをお面付きの芝居で演じた班の生徒の意見であり、5つ目の回答はエリザベス1世とフェリペ2世を人形劇で演じた班の生徒の意見である。もちろん、準備時間が限られている中で、役割分担した方が効率はよい。ただ役割分担の結果、絵を描くという作業中心になってしまう生徒もいたのだ。実は昨年度この授業の企画をしている途中段階では、絵を描くといった作業の時間中心にならないよう表現方法は芝居のみにしようと考えていた。しかし、高校生ともなると照れたり、恥ずかしがったりすることもあるかと思い、紙芝居や人形劇も方法として取り入れた。その結果、あまり照れずに発表できるうえ、発表中に脚本を見ることができるので、見ている生徒に伝わりやすいという思わぬメリットもあった。ただ、今回の生徒の意見からも準備段階のあり方については改善する必要がある。現在、改善策として検討しているのは、1・各班のメンバーを4ないし5人以内として全員で脚本作りをするように指導する、2・表現方法を芝居のみとし、プラカードで配役を示すなどである。

ところで、発表当日は愛知教育大学の教職大学院で学ぶ大学院生4名が授業見学に来ており、授業が終わった後で、その大学院生たちと意見交換の場を持った。そこで、一人の大学院生から「この授業の評価はどうされるのですか?」という質問があった。評価については、昨年度から準備段階の取り組み方と提出された脚本をそれぞれA・B・Cと三段階で評価をつけ、この三段階の評価を学期末の評価に組み入れていた。ただ、多くの生徒は前向きに取り組んでくれるので、評価に大きな差はつけられなかった。私はそれでも良いと考えていたのだが、大学院生の質問を受けてから、それなりの授業時間をかけて活動するからには、より明確で客観的な評価基準を設けた上で、教科の内規上許される範囲で学期末の評価に組み込む必要があると感じている。

4 今後の取り組み

今年度は2学期末から3学期初めにかけて、2年生の世界史Aでも歴史の場面を演じる授業を進めている。生徒への案内は今までとほぼ同様のものを配っているが、ここではテーマを文学作品以外とし、5人以内の班編制で全員が台本作りに携わるよう指導している。ただ、芝居以外の方法だと、どうしても絵を描く作業時間が長くなる傾向にある。また本校はオーストラリアのメルボルンにあるアイバンホー・グラマースクールと提携し、交換留学を行っているが、ちょうど1クラスが留学生の受け入れ期間に発表をする予定であった。そこで昨年度、日本語と英語を織り交ぜて芝居で発表をした班の発表を撮影した動画を見せ、留学生にも伝えられるように英語での発表を呼びかけてみた。実際は2つの班が英語での発表を行い、アンケートの分析は未実施だが、生徒の話を聞くと留学生にも伝わっていたようである。

この英語での発表を見ていて、英語科の教員と連携すれば、より英語での発表を充実させられると感じた。また、文学作品の発表をさせるのであれば、国語科の教員と連携するのも一つの方法であろう。(今年度の応用世界史の授業では国語科の教員との連携を模索していたが、実現には至らなかった。)

5 まとめ

現段階で歴史の場面を演じる授業は、発表テーマの選ばせ方、発表準備のさせ方、評価方法など解決すべき課題を抱えている。しかし、英語での発表や、文学作品の発表などについては教科間の連携で指導ができれば、さらに興味・関心を高めていける可能性は大いにある。そして、何より生徒は自分たちで考えを出し合い、試行錯誤しながら準備を進めてくれる。その過程には、普段の授業とは違った楽しさがあり、休日に班員の家を集まって準備をしたり、授業後も残って劇や歌の練習をしたりする積極性につながったはずである。いつくかの課題を解消していけば、興味・関心を高めるだけでなく、学力向上にもつなげることのできる授業が構築でき、世界史Bでの実践も可能になると考えている。

6 参考文献

- 文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』 教育出版
小田原健一（2015）世界史 A 授業の実践報告 - 「世界史離れ」を防ぐための試み - 本校研究紀要 第39号、pp.21-25